

写真12



写真13



写真14



写真14・15

県道土佐山田前浜線の東側、千屋城跡の北東部に「ヤカシロ」あるいは「ヤカシロ田」とよばれる水田があり、かつその水田中に「ヤカシロ」と呼称される小丘がある。円錐形の小丘で径6m、高さ2.3mで頂上に小祠がある。伝承では射場から矢を放った的の名残とされているあるいは千屋城北辺の土壘の残丘の一部であるかも知れない。これより東方約25mにも幅3mで東西方向に26m、約80m²の竹林の壠状地形がある。この付近まで千屋城の外堀土壘の延長を推考するのは無理であろうか。そこから南を望む現況地形からしてもここまで推考は可能ではないかと思われる。空港周辺整備事業に伴う調査によってこの線上に壠状遺構が確認されていることもあり、千屋城跡の北限は竹林からヤガシロの小丘をへて、さらに県道を越えて西方100mの地点までのび、そこから南に折れたのではなかろうか。現況地形や、部分的な発掘調査からもその感を強くする。

現在千屋城跡周辺は、三ノ戸・本吉のホノギとなっているが、地検帳では、ネリキトヤシキ・寺内ヤシキ 本堂ノ前 本堂寺々中、庄主寺中 マサヤシキ ツメヤシキ 弓場ヤシキ ラトリ所 土るヤシキ 東キト 政所内などのホノギがあり、また土地では射場、ヤカシラ 北ノヤシキ ウシロヤシキ フルヤシキ 寺マエ 寺ヶ内など城跡と関連をもつホノギの所在も明確にされている。

写真15



III 調査の概要

図5 写真16・17・18

城跡の中心部に所在する八幡小祠の東隣である。戦後建てられた木造公民館の老朽化と、空港周辺整備事業の一環としての建て替えである。

公民館の所在する地点は、城跡詰の東南隅部にあたり、公民館の東の畠地には小祠や墓が点在した。調査は公民館の敷地と、この畠地をふくめ300m²を対象とし、調査方法は遺跡の性格からして最初から全面発掘を実施した。

写真16



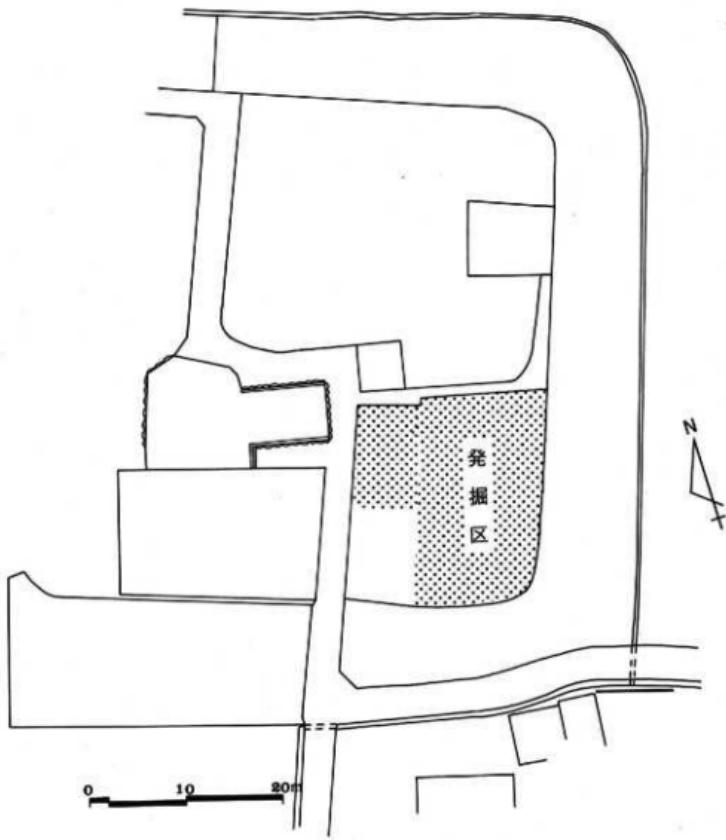
写真17



写真18



図 5



発掘区及び周辺

写真19

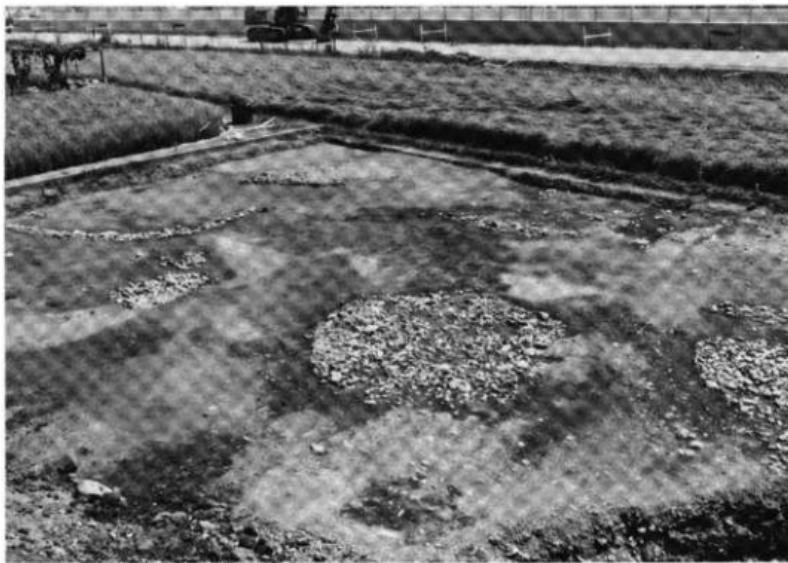
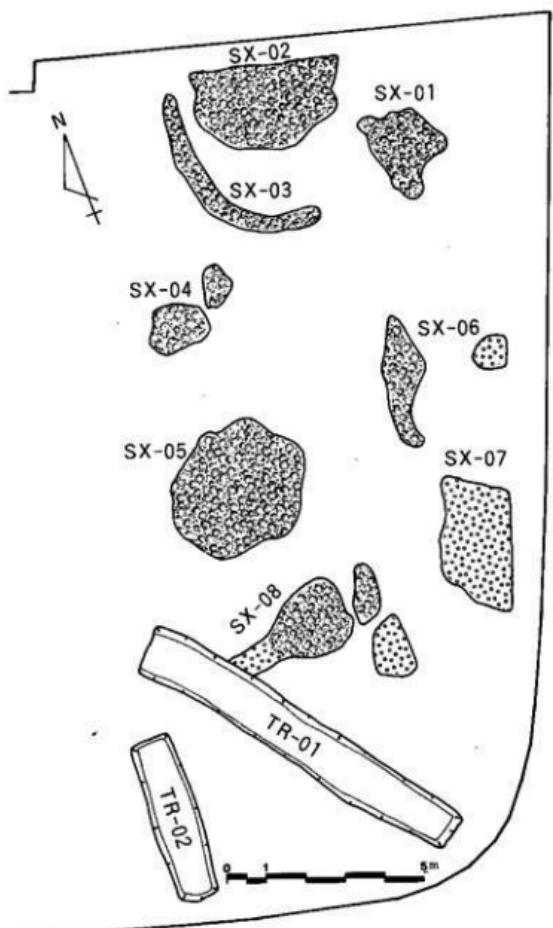


写真20



図6



集石遺構検出状況

図6 写真19・20

耕作土下の床上の上面、
黄灰褐色砂質土に混じって
2~7cm大の河原石の散在
が目立った。その層を掘り
すすむなかで、拳大から人
頭大の河原石の集中した部
分を検出した。河原石の集
中状況は石列状のもの、円
形のもの、楕円状のもの、
散在するものなど様々であ
り、8ヶ所にわたってその
集中地点を確認した。

図6 写真21

発掘区北東部より検出し
た不整形の石群で約4m²で
ある (SX-01)。石の密集
度も薄く、石間には黒茶褐
色の砂質土を多く含んだ一
層の石群である。石群中には
土師質土器の極小片や近
代の瓦片など若干混在する。
石群を除去すれば石群の存
在しない他の地点と同レベ
ルの平坦面となる。

写真21

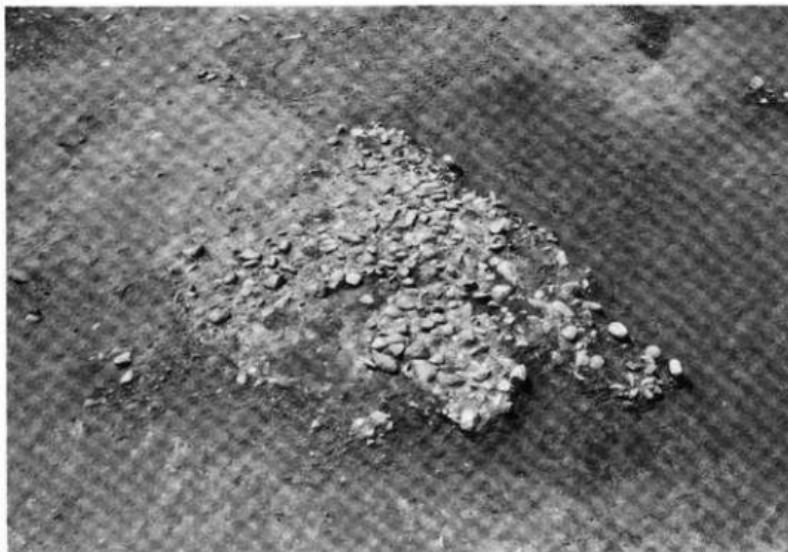


図6・7 写真22・23・24

他の石群と同レベルでは30個前後の石が約1m²範囲内で確認されたのみである。この石群とは別に、黒茶褐色で直径3.5m、半円は調査区外へのびる円形プランを検出した。この黒茶褐色土を10~15cm除去すると、黒茶褐色砂質土と河原石の約20~30cmにわたる混合層を検出した。この石群はバンクセクションの観察によればややレンズ状を呈しているが完全な石群ではなく、黒茶褐色砂質土の中に河原石が混入した様相を呈している(SX-02)。

発掘区北端壁部にも、バンクセクションと同様の石群層を観察することができる。黒茶褐色砂質土を除去した完掘状態は、径3.8m、深さ45~50cmの土壤状造構となる。東壁から南にかけてはほとんど垂直にたちあがるが、西壁部にはやや起伏があり、北限は土壤中央部よりゆるく傾斜してたちあがる(SX-02)。

写真22



写真23

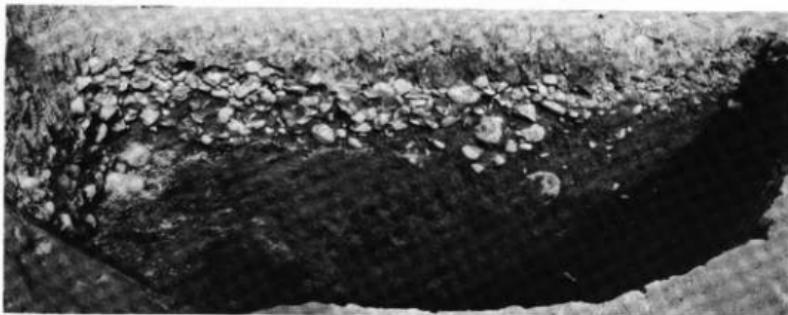


写真24



図 6・7・8 写真25・26・27・28

SX-02の石群に接する弧状(三ヶ月状)石列である(SX-03)。北端部に三角状の大きめの割石を配し、そこから約5.5mにわたって弧状(三ヶ月状)にのびている。幅は北部が50

写真25

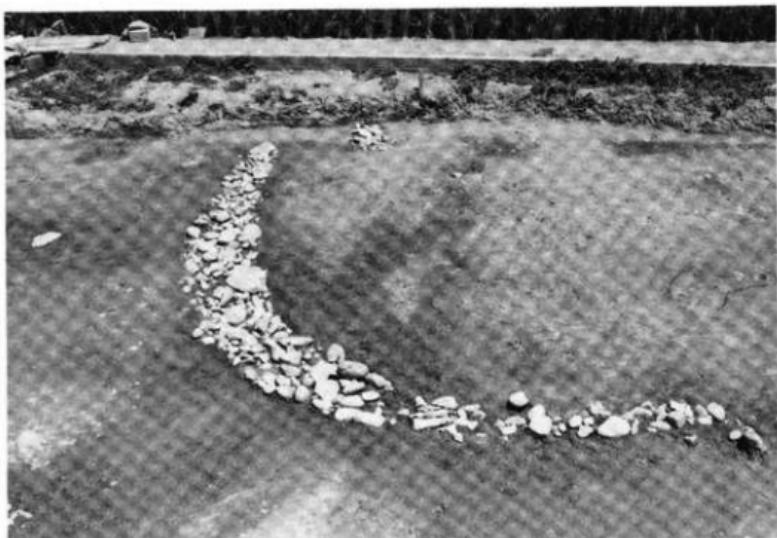
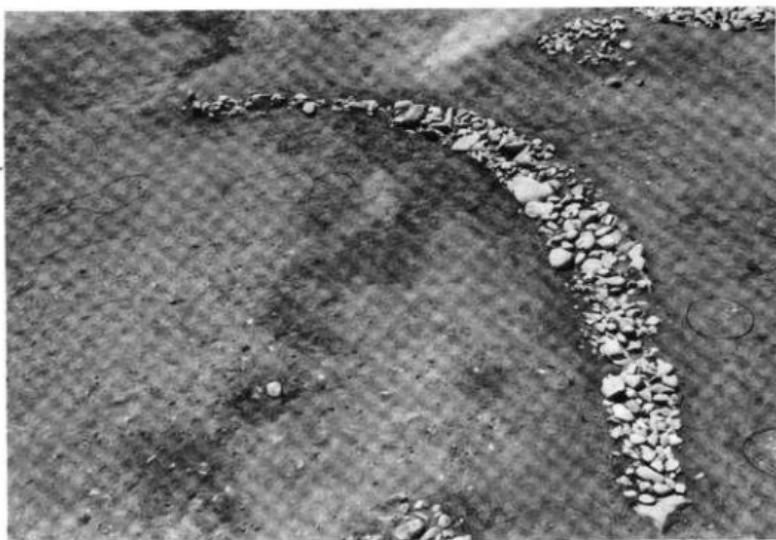


写真26



cm, 中央部が70cmとややふくらみ, 南端は30cmと狭くなっている。石群は拳大かそれよりやや大きめの石を中心に1~2段程度に重ね, それ以下は黒茶褐色砂質土が多量となり石も2cm大のものとなる。石を除去しての完掘状態は, 長さ5.5m, 幅は北部で40cm, 中央部で50cm, 南端では30~50cmのゆるやかなV字断面をもつ溝状遺構となる。

写真27



写真28



図6・7・8 写真29

発掘区のほぼ中央部で検出した2つの石群である(SX-04)。北側は約0.6mにわたって径10~15cm大の河原石がまばらに散在する部分である。一列の石を除去すれば、石群のない地の平坦部レベルと同レベルとなる。

写真29



写真30



図6・7 写真30

その南に接して約1.5m²にわたる範囲の石群である。すべて河原石であるが石群中に数個の大石が混在する。石を除去しての完掘状態は長径1.5m、短径1.2m、深さ20cmの卵形の土壤状遺構となる。底面は多少の起伏がある。

図6・7 写真31

発掘区中央部に所在する円形の石群で、直径3.5m、面積9.6m²と最大規模のものである(SX-05)。すべて河原石で、他の石群同様に黒茶褐色砂質土と混在する。この混在層は深さ20~30cmの厚さで検出され、それ以下は親指大の石と黒茶褐色砂質土の混合層に変化し底部に至る。

完掘状態は、直径3.5m、深さ40cmの円形土壤状遺構となる。壁のたちあがりはほとんど垂直に近く、その状態はSX-02ときわめて類似している。底面は比較的平坦である。

円形状の石群を除去する段階で、石群が南に延長された形で検出され、あわせてそれも除去すれば最終的にはSX-08の土壤状遺構に接続した。

写真31



写真32



写真33

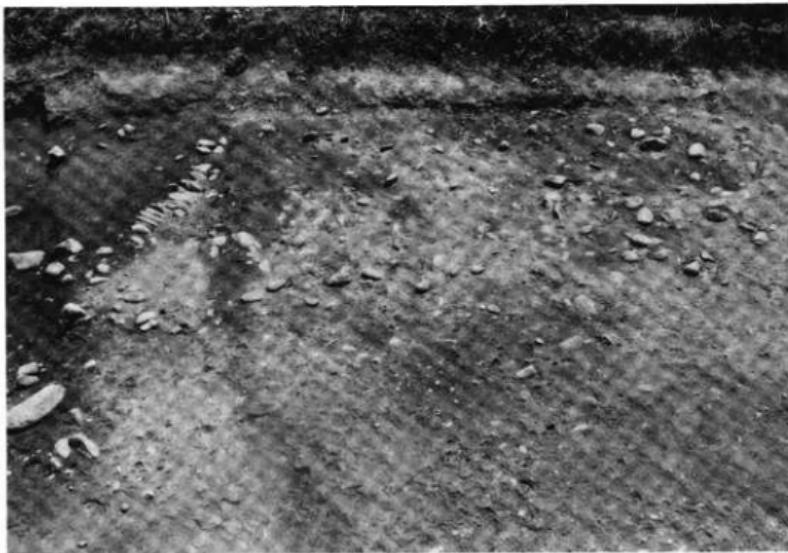


図6・7 写真32

調査区東端の中央部に散在する石群である(SX-06)。散在範囲は約9m²にわたるが、他の石群のような密集度は全くない。平面プランは歴然とはしないが、石が混在しやや黒味をおびた土層を除々に排除し発掘すれば2ヶ所にわたる不整形の土壤状遺構となる。ひとつは径1.0m、深さ30cmの円形状で、他は山字形で面積3.5m²深さ45cmで、底面はきわめて起伏に富んでいる。

図6・7 写真33

発掘区中央部の東端で約6m²内に散在する石群である。(SX-07) ただ散在した石群の北端部に長径20~30cm、短径10cm内外の長楕円形の河原石を東西方向に長さ1.5mにわたって並列した石列を検出した。しかしこの石群も一個ずつの配列で終り、特別な遺構としてその性格を推考することができるものではなかった。位置的にはSX-06の南に接するものであり、面積的には広いが、SX-05のような密集度はなく、石もまばらで北接するSX-06と類似しておりその延長とも解されよう。平面プランは歴然としないが、石が混在する黒味をおびた土層を除去すると、東端は発掘区外にのび、南壁は30cmほど垂直にたちあがる。西面は傾斜をもってゆるやかにたちあがり、北は不整形のままでSX-06に接続する。底面は比較的平坦である。

図6・7 写真34

発掘区南端で検出した石群で、ほぼ9m²のなかに3ヶ所にわたって集中している(SX-08)。このなかで密集度の濃い石群は径1.5mのほぼ円形の石群で、その状況はSX-05に類似している。その東に2ヶ所にわたって小規模ではあるが散在した石群部分がある。その状態はSX-04の北石群と類似している。それぞれの石群の石を除去し発掘すると、深さ45cm内外で北のSX-05に接続する。底面は平坦で東壁は傾斜をもち除々に東にむかってたちあがり、SX-07の西面たちあがり部に接続する。

写真34

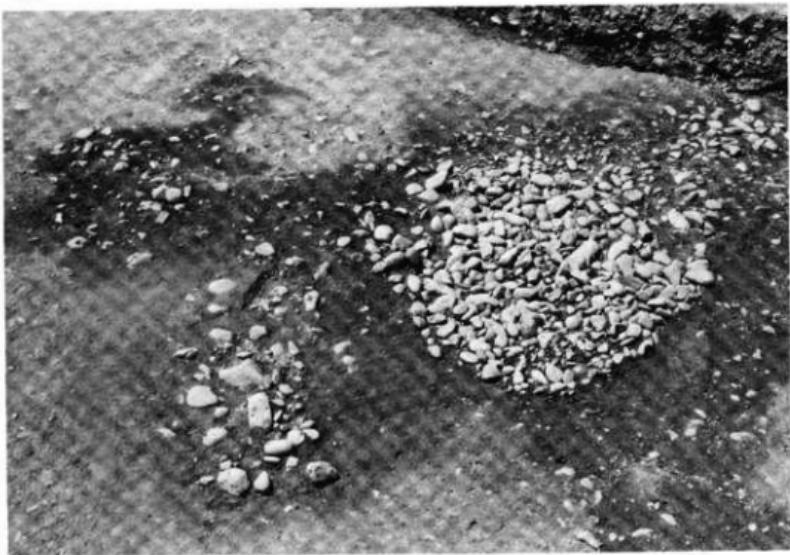


写真35

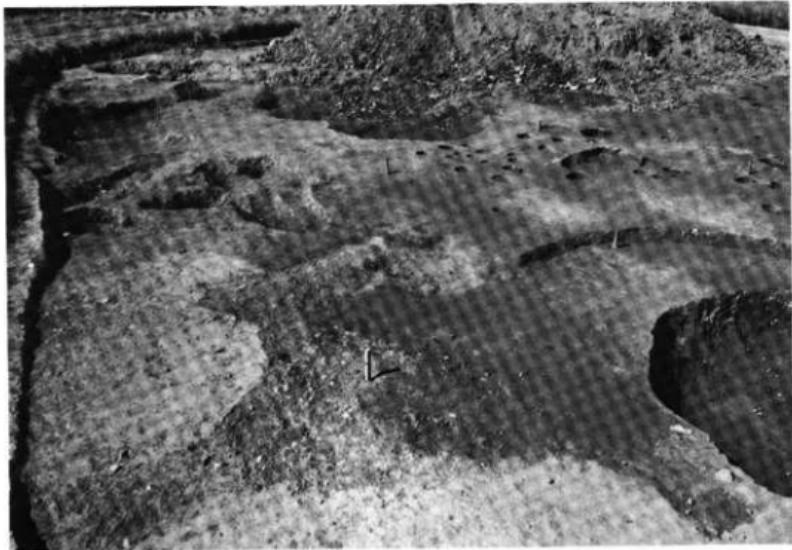




図7 写真35・36

完掘した土壤状遺構は SX-02 と SX-05 が径約 3.5m, 深さ約 40cm, SX-04 と SX-06 東土壤が径約 1m, 深さ 20~30cm とともに円形で類似点が多い。SX-03 は石列同様の弧状の溝状遺構となる。その他は全く不整形で搅乱崩壊とせざるを得ない。土壤内からの出土遺物も土師質土器、備前、古瓦、近代陶器等の磨耗した細片が散在するのみである。完掘状態や出土遺物から遺構の性格は考えがたい。

図7
土壤状遺構検出状況

図8 写真37・38・39・40

発掘区の北西部約100m²間に114個の柱穴状ピット群を発掘した。平面プランはすべて円形で、径50cm内外の10数個を除いた他は、平均して20~25cm大のものである。深さは10cm内外のものから30cmほどまでありまちまちである。

写真37

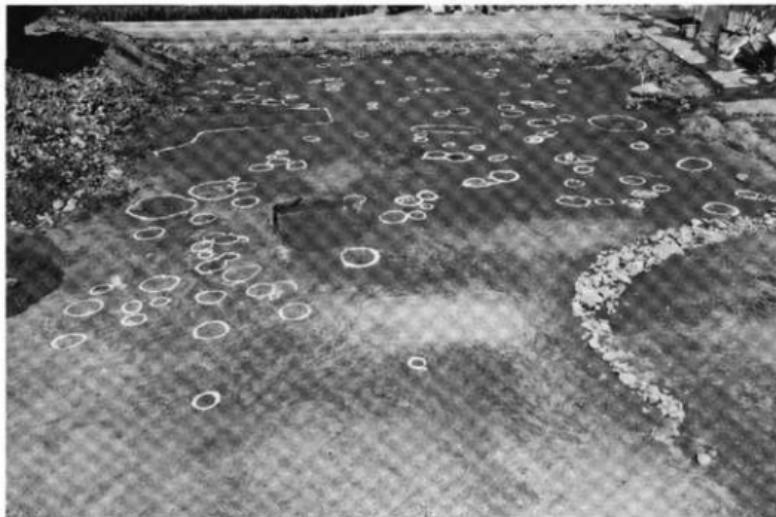


写真38



これらの柱穴には建造物の存在が考えられるわけであるが、その配列・規模等から少な
くとも発掘範囲内では規格性がなく、建造物を想定することは不可能であった。ピット内
からの出土遺物も、須恵器片や土師質土器の磨耗した細片、近代の陶器片など（写真43
・44・45）が混在しており、それぞれの時期の考察は不可能であった。

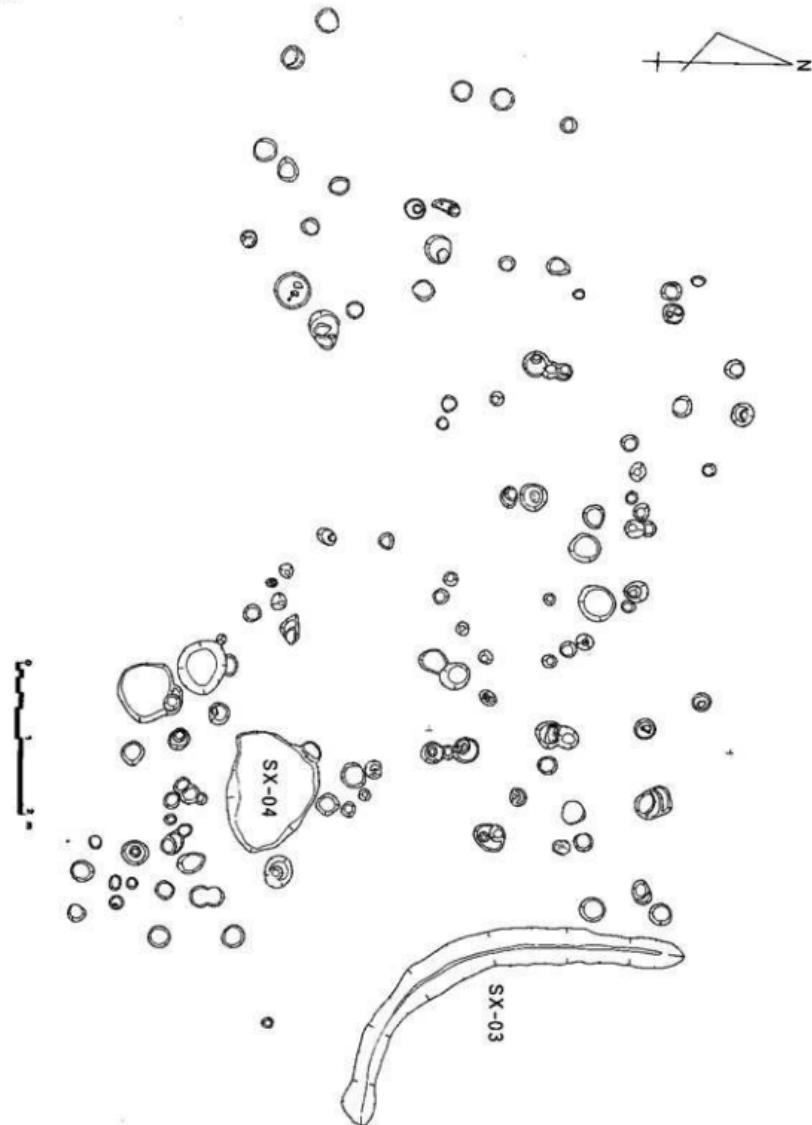
写真39



写真40



図 8



柱穴状ピット及び土壤状遺構完掘状況

写真41



写真42



図6・9 写真41・42

調査の最終時において、土壤状遺構の広がりの確認のため2本の試掘溝を設定した。

TR-01は1.5m×9m、深さ40~70cmのものである。I層をみると内側から外側(内堀)にむかい、除々に浅くなる3ヶ所の土壤状遺構を観察することができる。これらは前述の礫を含む(石群)土壤状遺構と同質のものであり6~7cm大から2~3cm大の大型の礫を多量に含む層である。II層も同様に礫を含むが、礫のサイズは2~3cm大のものばかりとなり、I層に比して量的にもきわめて少いものとなる。III層は全く礫を含まない茶黒色の粘質土層となる。

TR-02は1m×4.5m、深さ60cmであり、ひとつの大きな土壤状遺構が存在する。層位的には前述の試掘溝と同様である。

これらの試掘溝の観察からしても、発掘区東部から南にかけてはこの種の礫を含む大小さまざまな土壤状遺構の点在することを指摘することができる。

図 9



写真43



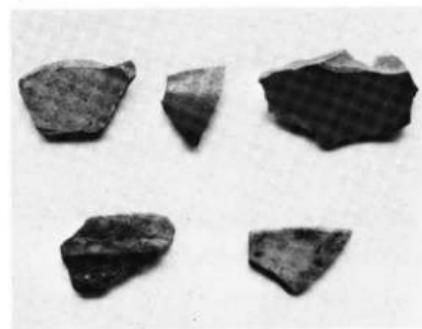
土師質土器片

写真44



備 前 片

写真45



青磁、瓦質土器片

IV おわりに

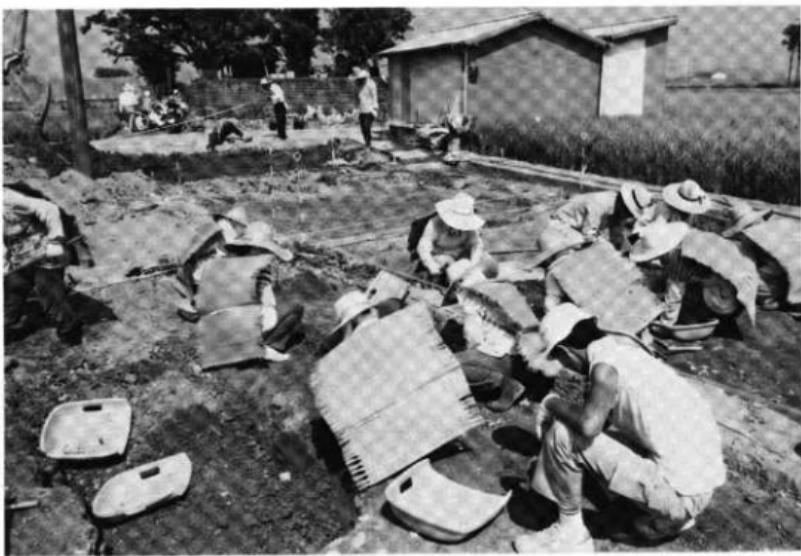
千屋城跡の復原研究は現在まで正確に行われたものはない。長宗我部地検帳や地籍図・ホノギ・現地踏査による地形観察等から若干の推定考察はなされているが説得力は十分でない。考古学的な発掘調査による成果が待たれている時であり、本調査も千屋城跡解明の糸口となるべき成果が期待されたが、結果的には千屋城に関連する遺構と考えられるものの検出はできなかった。遺物もまた土師質土器・備前・青磁・染付など城機能の時期のものと考えられるものは若干採取したが、いづれも細片であり、そのほとんどが攪乱の状態での検出であり決定的なものを確認することは不可能であった。

8ヶ所にわたって検出された石群や土壤状遺構の性格の把握や、また出土遺物からそれらの年代を把握することも不可能であった。高知空港整備拡張に伴う発掘調査、いわゆる田村遺跡群のなかにも、この地区同様性格不明の石群や土壤状遺構が検出されている例があり、それらも含めて今後検討していくかなければならない遺構である。

また、おそらく掘立柱建物の柱穴と推定される百余の柱穴状ビット群についても、ビット内からの出土遺物も少量・細片かつ土師質土器から近代陶器に至るものまで含まれ、建物やその時期の考察など全く不可能であった。

発掘調査地点は、地形上の観察からすれば、内堀内の千屋城跡に相当する地点である。城跡関連の何らかの遺構の存在は当然考えられる地点である。ただ発掘前の公民館敷地東側の畠地には数基の墓や小祠が存在したことや、口伝によれば、この部分がかつて柿畠・桑畠であったとも云われる。あるいはまた野見嶺南の學習塾跡・邸跡とも伝えられる。これらの前歴からすれば、公民館の建設も含めて今まで相当の攪乱を考えねばならない。出土遺物の状況や、各所の層位の観察からもこの攪乱は判然としている。ただ北西部に集中して検出された柱穴状のビットは掘立柱建造物の柱穴として間違いないものであり、又石群のなかには庭園的な要素も考えられるものもあり、田村遺跡群の関連遺構とともに今後検討をすすめていかねばならないものである。

(宅間一之)



真夏の発掘調査風景

高知県南国市
中世城館跡

発行日 昭和60年3月30日

発行・編集 南国市教育委員会

印刷所 近森謄写堂